

方等 (Vaipulya) 時の仏教

——『大宝積經』の立場と意義——

橋 本 芳 契

天台五時教における第三時は「方等」の名で呼ばれる。他の四時が「華嚴」「阿含」、および「般若」「法華・涅槃」として具体的な経名で表示されるのと異なる点である。そこにどういう実質的意味があるのか。またさかのぼって五時教ごとき教相判釈そのものの思想的立場やその宗教的意義は現代においていかに理解さるべきものなのか。そうした諸点を大藏經の分類について、多分にこの教判の別に随つて為したと考えられるもののうち、「方等」の部別中に代表的經典の一つとして収まつた『大宝積經』の一特色に即して解明しようとするのが本稿の目的である。

まず「方等」の原語についてであるが、それはサンスクリットで 'Vaipulya' と云ふ、これを「方広」とも訳する。パーリ語では 'Vedalla' (Tibetan: Sin-tu rgyas-pa) であり、もと「十二部經」中にも含められた經典様式の一つの称呼である。十二部經中、授記 (Vyākaraṇa) 無問自說 (Udāna) の二に

併せこの方等との三者を除き去つた「九部」を「小乗教」(Hīnayāna) に属するものとする意味からは、方等はすなわち「大乘のもの」(Mahāyāna) のうちなることは明らかである。同時に、そこにすでに「抑小揚大」の教判意識のあつたものであることに注意したい。やがて『華嚴』(大方広仏華嚴經)にしても『勝鬘』(勝鬘師子吼一乘大方便方広經)にしても、代表的な大乘經典は「方広」(方等)の語を経題に含め、他にも「方等」や「大方等」の語を冠した大乘經はかず多い。法華經方便品第二には、「我九部法、隨順衆生說。入大乘爲本。以故說是經」と言い、『往生要集』下末には、「九部不了教」と説く。九部經はなお不了義で、大乘に入つてはじめて了義であるということである。了義・不了義については『維摩經』法供養品第十三に、「四依の法」を説いたなかに、第三に「依了義經、不依不了義經」と明かしている。了義に依り不了義に依らない中に大乘の道が明らかであ

るとすれば、「方等」とは限りなく大乘菩薩道 (Bodhisattva-carya) に志向しようとするものを意味するとしてよい。

ところで前記大藏經中の方等部は、いうまでもなく大乘經の範圍内のものであるが、これをさらに「方等顯說」と「方等密呪」の兩部にするのが古来の扱い方であつた。明の智旭 (一五九九—一六五五) が永曆八年 (一六五四) に著わした『闍藏知津』には、方等顯說として『大宝積經』一部一二〇卷以下、三六九部一一〇七卷を数え、同じく方等密呪には「密呪經」として『首楞嚴』以下、「密呪儀軌」として『大教王』以下の各諸經、併せて三六六部六四二卷の多数があるとしている。故に方等部には合計七三五部一七四九卷の龐大な經卷が含まれることになるが、これをさきのごとく顯說と密呪に分けるのも一見識である。しかし密教義は大乘の当初からあるもので、顯密不二の立場からすれば、方等部は總じて密教義を内蔵しつつ他方これを顯說する部類のものを収めた所にその大きな思想的特色があつたとすることができよう。したがつて「方等顯說」中にも密教教意を見おとさないことがこの部の經典を見る目であるはずである。

『大宝積經』(Mahāratnakūṭa-sūtra) はさきのように方等部中でもその顯說を代表すると考えてよい而も一二〇卷にのぼつた大部な經である。この經名についてまず連想するのは『維摩經』仏国品第一に登場する「宝積」(Ratnakūṭa) 長者

子である。この長者子は、毗耶離 (Vaiśālī) の町から仏迦 (菴羅樹園の法座) に参集した五百の長者子の總代であり、同時に如来淨土の因果義の顯說を求める一經の立役者である。ひるがえつて眺めるに『大宝積經』は四九種の大小の經典の一大編集であり大集成經なのである。その見方にはさまざまな観点や視座があるであろうが、そのあるものについてはいまのべた如来淨土說のかかわりにおいてこれを見ようとするのも一つの見解ではなからうか。『維摩經』については、その直接の関連經が前記四九種中に含まれているわけではないが、維摩居士の本国 (本地) とされる「阿閼伽国」(東方世界) を説く經として第六經「不動如来会」二卷が含まれており、それは『阿閼伽国經』の新訳である。また類經として第五經に「無量寿如来会」二卷も存し、これまた西方阿弥陀仏の本願海を説いた『無量寿經』の異訳本として古くから注意されてきたこと周知のとおりである。

ところで漢訳『大宝積經』(百二十卷) は唐菩提流志訳と掲出されているが、菩提流志が全く新規に訳出したのは四九種の經中一〇經のみで、二三經は旧来の訳本を収め、のこり一六經は古訳本を改訳したものである。前記「無量寿如来会」も、「不動如来会」も、共にその改訳したものの中に含まれる。なお『大宝積經』では所含の四九經を、いずれも「經」字に代えて「会」としているのであるが、旧訳本を採るには

その古名もそのまま併挙していることに参照して、四九経の一体性を理念的に表明しようとする意図で訳出者が「会」の一字で貫いたものと考えられる。したがって、特に第五第六の両経が、無量寿（西方）と不動（東方）の両如来の浄土説として一連併挙された次第も注意して見らるべきものと考ええる。そのうち『無量寿経』と『無量寿如来会』との対比研究は、阿弥陀仏信仰の盛大に伴い古来各様になされてきたと見えるが、『不動如来会』とその旧訳である『仏説阿閼仏国経』との両者を見くらべることは寡聞にして余り多くを知らない。しかし、浄土思想研究からも經典発達史上からも両経の辿った跡を見ることは意味あることであるに相違ない。以下に若干これを試みたい。まず両経の品名を対比させてみよう。

〔阿閼仏国経・不動如来会対照表〕

阿閼仏国経巻上（後漢支婁迦） 大宝積経巻第十九（唐菩提流志識訳） 不動如来会第六の一

発意受慧品第一

授記莊嚴品第一

阿閼仏刹善快品第二

仏刹功德莊嚴品第二

弟子学成品第三

声聞衆品第三

巻下

巻第二十不動如来会第六の二

方等（Vajrapāyā）時の仏教（橋本）

諸菩薩学成品第四

菩薩衆品第四

仏般泥洹品第五

涅槃功德品第五

往生因縁品第六

『阿閼仏国経』二巻は、後漢の支婁迦讖（生年不詳。建和元年、西紀一四七年入国。一八六年没）により訳された。中国で『維摩』の漢訳が前後六回なされたとするうち最古の訳『維摩経』二巻も同じ後漢の嚴仏調所出であつた。しかしこれは今逸してない。同経に、さきのごとく維摩居士の本国として阿閼仏の妙喜（Aśhrīṣṭi 阿比羅提）世界（Vokudhātū）が語られていることは、『維摩』の方が『阿閼仏国』よりも遅れて成立したことを示すであろう。しかしまた両経中国伝来の時期がほぼ同時であつたことからは、後者に余り距たらずに前者が出来たものとしなくてはなるまい。

さて『不動如来会』は、さきの『阿閼仏国経』より約五百年おくれ、唐代となり菩提流志（Bodhiruci 長寿二年、西紀六九三年に長安来）により『大宝積経』中の一経として訳編されたが、両経すでに経題において「阿閼仏国」と「不動如来」のちがいがあり、品題においても、旧訳が「発意受慧」としたのを新訳では「授記莊嚴」とした（第一品）のをはじめ、第二品以下においても「阿閼仏刹善快」を「仏刹功德莊嚴」、

「弟子」または「諸菩薩」の「学成」を「声聞」または「菩薩」の「衆」とし、ことに一經の最後部については、後漢訳が「仏般泥洹」一品とだけしたのを唐訳では「涅槃功德」・「往生因縁」の二品としたちがある。その他でも注意しなければならないのは全体として叙述分量が著しく後者において増大し、大正藏本では『阿閼仏国經』二〇段分に対し、『不動如来会』三三・五段分になつてゐること、また經末において兩經間に大きな出入りのあることである。出入とは『不動如来会』の最後には、『阿閼仏国經』に欠かした大正藏本で約二段半分の部分（往生因縁品第六の末段）があるのであるが、これは後漢訳の原典にすでに欠けていたものか、原典にあり、支婁迦讖訳本にもあつたが、入藏までの経過中に欠落したものか不明である。³念のためその部分を左に要説しよう。

〔仏が〕法門の求めにつき〔特定の村落でそれが得られねば隣村にゆき、書写・受持・誦誦・通利し、他人のため開演する。〕余方にも獲られねば「我は無上菩提において退転の相を生じない」と發誓し、〔三〕「我すでに不動如来の法門と名号を聞くに由り、この人、我において利益し、我をして聴聞さす」ことを弘願する。四こうした称讚の法門が、演説と聞に預かる者にあるのは、如来威神力に由る、と言う。

つぎに、〔五〕如来滅後も不動如来の威神力により引続き聞く

ことができ、〔六〕四天王・釈提桓因等はこれを加護し諸法師にこの法を宣揚させ、かの菩薩をして本業を成就さすべきであり、〔七〕四天王等をして威加策進し、諸菩薩をして聴聞さすべきである。かくこの法門は能く広大な功德を成就する。（筆者註、その辺に「方広」Vajrapāyāの義がのべられてゐる）

さらに念仏・称名の利益について、〔八〕国中に雨雹の災、非時の霹靂や種々怖るべき事あるには、善男子善女人等、当に専ら不動如来を念じ、名号を称すべきである。〔九〕この諸災害みな消除するは、彼如来の往昔に百千諸竜を弘済し衆苦を解脱したまえるに由る、また〔三〕同慈悲本願・誠諦不虛なるに由り、善根を廻向し、円満を要期したまえる故である。〔十〕かの名号を称うれば憂患は自消す。唯だ有情の宿業成熟せるは除く、とする。

以上の仏言に、〔五〕舍利弗は、「諸菩薩の現身に証菩提を欲するは、応に不動如来の如く往いて願行を修すべし」と賛し、仏諾を得る。

仏さらに、〔五〕菩薩摩訶薩の、已に能く具に淨刹（筆者註、淨土のこと）を修し、及び当に淨修すべきこと不動如来の如き者は、みな当に阿耨多羅三藐三菩提を証得しよう。〔四〕而も仏性及び一切智（筆者註、これが『阿閼經』では「薩芸若」Saraññaと表記され、『不動如来会』との兩經を一貫する根本問題。品題中の「発意」とはこの意を発するのである）において仏国を摂受すること

と悉皆同等ながら、菩薩と声聞（弟子）とに優劣なくはない。而も解脱において異なることなし、と述べたまい、以下流通分に入るのである。

(四) 上来、仏説を聞いた欲界諸天・梵天衆は仏に向かい合掌頂礼、不動如來に南無し、此界釈迦如來がよく彼の稱讃法門を説きたまえるに帰命し、(一) 欲界諸天は曼陀羅花・諸天香を仏上に散じ、所散の香華は虚空中で合して蓋を成し（筆者註、維摩經では獻蓋合蓋であつた）、諸天の花香は遙散彼仏して供養をなす。(二) 天帝釈は「我此四衆、欲界諸天、皆彼の不動如來を見んと欲す」の念をなし、(三) 仏はその念を知り、結跏趺坐して虚空に安処される。(四) 是の諸大衆は仏の神力で空中に住し、皆かの妙喜世界・不動如來・声聞衆を遙見する。(五) 衆みな見おわり、右膝着地し、不動如來に向きまつる。(六) 此界の衆人、皆「三十三天でなくば、かの仏を見、而も会に來集し、礼拝供養できようか」の念をなし、(七) 帝釈は、「彼界諸天は人相（人間の姿）で住する。われ彼の諸人等の服玩資具を、彼の諸天と少の優劣も無しと見る」の念をなす。(八) 仏は神通を摂しおわり帝釈に告げ、「彼の諸人民は皆、天衆を受ける。汝まさに愛樂すべきである」と。(九) 是の諸人等、彼の如來及び彼の受ける天資具を愛樂する者を見たてまつる。(一〇) 彼の諸衆生は、余の世界より、命終以後、皆不動仏刹に往生を得る。

(一) 舍利弗は帝釈に、「汝、釈迦及び不動如來を見まつれり。此の縁の故に由り、汝此の身に大善利を得。況んや汝すでに過人の法を得たるをや」と告げ、(二) 帝釈は、「彼の諸衆生、此の法門を聞き、亦善利を得。何況、不動仏刹に生ずるを得るをや」の念をなす。(三) 仏は帝釈に告げて「彼の菩薩乘人、當に彼の仏刹に生ずべき者も亦善利を得。彼の諸菩薩、皆應に不退転に住するを得べきが故に。(四) 若し余菩薩の、其の現身に於て彼の仏國に願生しよう者は、應に皆是れ不退転に住すと知れ」と。

最後に(五) 仏がこの法門を説いた時、(1) 五百の比丘は無漏の法に於て心に解脱を得、(2) 五千の菩薩・(3) 六千の比丘尼・(4) 八千の優婆塞・(5) 十千（万）の優婆夷及び(6) 欲界中の無量の天子は彼の仏刹に於て皆、受生を願つた。(七) 仏この時、皆に「彼の仏刹に於て、當に往生を獲べし」との授記をなし、(八) 若し余の有情の當に願生すべき者は、如來當に「生彼仏刹」の記を与えるであろう、とし、(九) この時三千大千世界は六種（動遍動・等遍動・搖遙搖・等遍搖・震遍震・等遍震）に震動した。此の法門に由り加持する所ある故である。

(一〇) 仏がこの經を説きおわり、舍利弗等及び諸世間・天人・阿修羅・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽は仏所説を聞き、皆大歡喜し信受奉行した。

これを具説した意味は、將來『仏國經』『如來會』『兩經の

対比研究を精にするに備えてであつた。その他、学者がすでに二一願とかぞえている『仏国経』に拠つた阿闍仏の本願数も、『不動如来会』では三願の追加があり、該経流行の間に、増広のあつたことが知られる。

以上しばらく『大宝積経』所収四九経中、「如来会」と標記した『無量寿』『不動』の両経に大乘仏教における如来淨土の思想や觀念の具体的形態を措定するなかから、特に阿闍仏の本願を叙する後者について、それが『大宝積経』に編入される以前の古経『阿闍仏国経』としてのものから、どのような変容と位置付に於て新経に加えられたかを見ようとした。尨大な経であるから『大宝積』全体に通ずるは容易でないが、傍流としての『維摩』所出の淨土義に参照しても阿闍仏信仰は原始淨土思想中の一祖形として、殊にそれが密教中に溶けこんでいつた宗教的証跡の實際に照し、逆に阿弥陀仏信仰の普遍的意義を明らかにする意味においても、『大宝積経』における如来会経の地位を見定めることは重要な學問的課題である。『大宝積経』が方等顯說中の首座を占めさせられたことは、同経そのものもつ大乘方等の意義にほかならず、その立場は十二部経でいう「方等」Vaipulyaの精神で貫かれており、したがつて教判中の「方等時」はまた、内面的には『維摩』『思益』『勝鬘』『提謂』等の諸経によつて代表表示されたのであり、『無量寿経』といえども、教判上の

所屬は「方等」内であつたことに深く注意しなければならぬ。ちなみに『不動如来会』については、『阿闍仏国経』で単に「阿闍」仏般泥洹の一品とだけしていたものを「涅槃功德」と「往生因縁」との二品にしたのは、もとより經典思想の内容的加増ではないが、そこに往生觀念進展の跡が見られる。

- 1 仏言、善男子、法供養 (dharmaṃ pūjā) 者、……依於義、不依語 (arthapratisaranam na vyāñjanapratisaranam)。依於智、不依識 (jñānapratisaranam na vijñānapratisaranam)。依於義經、不依不了義經 (nitarhasūtrapratisaranam na neyārthasamyīkāsūtrabhiniवेश)。依於法、不依人 (dharmaṃ āpratisaranam na pudgaladīśīyupabādhiniवेश)。(梵文にこゝつは l'Enseignement de Vimalakṛti par É. Lanotte, 1962, Louvain, p. 380 参照)
- 2 最近では藤田宏達『原始淨土思想の研究』(岩波、昭45)が挙げられる。
- 3 是時仏告舍利弗、有国名妙喜、仏号無動。是維摩詰、於彼国没、而來生此。(維摩詰所說經、見阿闍仏品第十二)
- 4 「国訳一切經、宝積部七」所収『仏説阿闍仏国経』(昭7)脚註で訳者連沢成淳師は、「異訳に对照するに、以下本文に脱文あり」(同書169頁)としている。筆者もこれに賛する。
- 5 廻向 (pariṇāma) の語、『阿闍仏国経』には「勸助」と訳す(国一經、前掲本163頁参照)。

6 藤田博士前掲書424～426頁参照。加わった三願とは、(7)無有三

病の次、「無有虚妄」(彼仏土中、一切有情、無虚妄語)、(四)飲食自然の次、「無有穢惡」(無有便利、穢惡不淨)、(六)八味浴池の次、「園觀清淨」(園觀有多、悉皆清淨。諸衆生輩、多以法樂而居)である(大正藏、十一、宝積部上105頁参照)。

7 阿闍如來は、大日(Yairocana)ノ空成就(Amogha)ノ宝生(Ratnarūpika)ノ無量寿(Sāvatika)の四如來と並んで五仏中の一体であり、秘密集会タントラ(Guhyasamājatantra)では毘盧遮那(大日)如來と位置を入れ代り両界曼荼羅の中尊となる。また化身としてヘルカ(Heruka, Dge-spa rjorje)という忿怒尊にもなる。

8 『勝鬘夫人會』は『大宝積經』の第四八經として収まり、劉宋求那跋陀羅訳『勝鬘經』の異訳である。

9 聖德太子『維摩經義疏』仏国品段に、『無量寿經』の引用あることは、古く『維摩』と『無量寿』の両經が一体として行われていた証拠である。拙稿「維摩經義疏の浄土教性的性格について」(聖德太子研究会『聖德太子研究』一九七六、第九・十合併号)参照。

追記

『大宝積經』梵名、具には“Mahāratnakūṭadharmaṃpariyāyāsāta-sāhasrikāgṛantha”であり、ついで安慧(Sthiramati)作といふ四卷註(Mahā……srikāparivartakāśyapa-parivarta-ṭīka)ができてゐた。

[昭和51年度文部省科学研究費による研究成果の一部]

方等(Vaipuḷya)時の仏教(橋本)

執筆者紹介(五)

- | | |
|-------|------------------|
| 小林 實玄 | (龍谷大学講師) |
| 小林 昭英 | (龍谷大学仏典翻訳部員) |
| 成瀬 隆純 | (早稲田大学大学院修了) |
| 福原 隆善 | (智恩院浄土宗学研究所研究員) |
| 小林 尚英 | (大正大学総合仏教研究所研究員) |
| 中山 正晃 | (龍谷大学助教授) |
| 日置 孝彦 | (神奈川県立金沢文庫学芸員) |
| 渡辺 守順 | (高校教諭) |
| 石岡 信一 | (東洋大学東洋学研究所研究員) |
| 柴田 哲彦 | (大正大学講師) |
| 神戸 和麿 | (同朋大学助教授) |
| 池田 勇諦 | (同朋大学助教授) |
| 岩本 泰波 | (埼玉大学教授・文博) |
| 笠井 貞 | (群馬大学教授) |
| 杉尾 玄有 | (山口大学教授) |
| 花野 充昭 | (早稲田大学大学院) |

(九五頁につづく)